

小学二年生の私が変質者に遭って、思い出すのもおぞましい、けれど十年経っても二十年経っても忘れられないような痴漢行為をされ、当然親など言えるはずもなく友達や教師に言うという選択肢もなく、でも黙っているのは悔しくて悲しくて、泣いて悩んで吐いたりもして耐えられなくなった末に打ち明けたのが夢実だった。

別に、私と夢実は友達でも何でもなかった。

家が近かったり（徒歩六分程度）はしたけれど親同士が知り合いということもなくただそれだけだったし、登校をともにする通学班が一緒というわけでもなかった。変態行為をされたことを忘れられなくて、いつも使っている通学路は通りたくなって遠回りして、でもこの道にもあいつがいたらどうしよう、こんな田舎だしいつ会ってもおかしくない、またあんな目に遭ったら……と七歳にして死を考えながら歩いていた私の後ろにいたのが、たまたま夢実だったというだけだ。

人の気配と足音に敏感になっていた私が振りかえると、夢実はびたつと足を止めた。そして、きよとんとした顔で、まんまるいリスのような目で、私を見た。

「……長原夢実」

「うん」

名前を呼ばれて、夢実はにこっと笑った。

その頃の私にとって、夢実は夢実ではなく、『長原夢実』だった。私に限らず、ちゃん付けや愛称で呼ばれる存在ではなく、常に、誰からも、フルネームで呼ばれる存在。それが彼女だった。

「一緒に帰っていい？」

「うん」

言葉を交わしたことなどなかった。おはようの挨拶すらしていない記憶はない。そんな私の唐突な申し出に、夢実は迷うこともなく頷

いて、そしてたつと小走りに駆け寄ってきて私の隣に並んだ。

「夢実、ちゃん……は、いつもこの道から帰ってるの？」

二度目も『長原夢実』とフルネームで呼ぶのもどうかかと、ぎこちない『ちゃん』付けで呼んで私は聞く。

「うん、この道が、つうがくろだから」

「ふーん、夢実ちゃんちの場所だと、こっちの道通ることになってるんだ」

その後、しばらくは無言で歩いた。

「夢実ちゃん、聞いてくれる？」

長原夢実になら、言ってもいいかな、と思った。どうせ聞いても大してわからないだろう、と思つたのだ。変に同情されたり、犯人に対して憤慨されたりするのがこわかった。彼女ならば、その心配もなさそうだった。

「うん」と頷くのを見て、話しだす。

理路整然と、ではなかった。感情が爆発するように、だつたと思う。十日ほど前にいつもの帰り道で変な男に変なことをされたこと、それがキモくてムカついてショックで悔しいのに誰にも言えなかったこと、怖いからそれ以来帰り道を変えているということ、朝はその道を通らなくてはいけなければ、通学班の人たちが一緒にだから自分に言い聞かせながら登校して、でもその場所を通るたびに思ひだしてしまつて気持ち悪くなって吐きそうになるということ。それらを、滅茶苦茶な順番で、同じところを何度も繰り返しながら喋つた。

話の途中でとつとくに私たちはそれぞれの家に帰るためには別ななければならない場所に来ていたのだけれど、最後まで聞いてほしくて、立ち止まって私は話し続けていた。そして私から吐き出される言葉がなくなると、夢実は笑った。丸い目を細めて、赤ちゃんみた